

平成 22 年度第 2 回長野市文化芸術振興審議会 要旨

- 【開催日時】 平成 23 年 3 月 24 日（木）午後 3 時から午後 5 時 20 分まで
- 【開催場所】 第二委員会室
- 【出席委員】 中山裕一郎会長、宮澤博副会長、小林一美委員、土本俊和委員、海沼和幸委員、小林玲子委員、清水隆史委員、山岸恵子委員、石田玲子委員、菱山佳代子委員
- 【出席職員】 堀内教育長、酒井教育次長、久保田生涯学習課長、山口局主幹（文化財担当）、鶴野生涯学習課長補佐、山岸生涯学習課係長、柳澤生涯学習課係長、吉岡生涯学習課主査、嶋田生涯学習課主事
- 【議事】
- （ 1 ）長野市文化芸術振興計画の進捗管理について
事務局より上記について説明を行った。
 - （ 2 ）長野市文化芸術振興計画 平成 23 年度実施計画について
事務局より上記について説明を行った。
 - （ 3 ）事業の推進に向けて体制整備について
事務局より上記について説明を行った。

主な内容（質問・意見）

【（ 1 ）（ 2 ）について】

- （委員） 文化芸術振興計画は平成 28 年度までであるが、平成 23、24 年度が一つのポイントになると思うがそのような認識でよいのか。
- （事務局） 5 年のスパンの中で、長野市総合計画とリンクして、計画の数値を入れている。
- （事務局） 予算の計画はマッチングしていなければならないもので、平成 23 年度に綿密な計画、審議をして、24 年度に重点施策として予算要求に臨みたいというのが教育委員会のスタンスである。審議会などでも十分にご意見をお聞きして、予算に反映していきたいと考えている。
- （委員） 平成 24 年度がひとつの区切りとのことだが、それは単年度だけのことか。
- （事務局） 重点施策は継続して行うものと単年度のものがある。新市民会館を文化拠点とするためには、単年度ではない重点施策にしたいのが教育委員会としてのスタンスだ。全庁的なものはあるが、教育委員会としての考え方はそういうことである。
- （委員） 文化芸術の平成 23 年度の目標値は、いま示されているものだけか。年代層も分かればいいが。
- （事務局） 市民会館が一時閉館になるので、今の目標値が大きく変わってしまう。今後、目標の立て方を含めて考えていく必要もあるのではないかと考えている。
- （委員） 文化芸術の目標値は、施設の利用人数などでしか測れない面があるが、皆さんで意見を出して何か別のものを作っていきべきではないかと思う。
- （委員） 目標値が大きく伸びているが、何か数字の根拠はあるのか。

- (事務局) 各施設の今後の推計を見込んだもので、市民会館の閉館は見込みに入っていない。
- (委員) そうすると、実態と合わない数字になっているのではないか。
- (事務局) 数値が閉館中減少するのは当然だが、平成 28 年には市民会館が完成しているので、その時点での目標は達成したいと思っている。それまでの間は、数値の若干の修正は必要かと思う。
- (委員) 今回の大震災の中、長野市が新しい市民会館を作ってよいのかと感じる。皆さんの意見を伺いたい。わくわくするような新しいものが見えてこない気がする。
- (委員) 先進事例について、調査検討を始めるという個所がいくつかあるが、既にある程度把握しているのか、それとも新たにこれから調査を始めるのか。
- (事務局) 平成 23 年度早々に長野市文化芸術関連施策調整会議(仮称)を設置し、庁内の横の連携を図って総合的に施策を進めていきたいと考えている。
- (委員) この中にも、新たな事業があるのではないのか。
- (委員) 前回の資料を見ても、目新しい事業があまりないように思える。
- (事務局) 新規事業としては、「街角に音楽があるまちづくり事業」がある。また、「長野市風景画展選抜展」なども新規で進めていくものだ。
- (事務局) 予算との絡みもあり難しい面もある。市民会館のファイナルに合わせて、「響つないで」の事業を実施したが、大変感激的だった。ぜひ次につながっていけばと思う。
- (委員) 松代イヤーが最後の追い込みとなり、これで一連のイヤー事業が終わる予定だったが、24 年度からは篠ノ井地区と信州新町地区でもイヤー事業を行うことになった。各地区に根ざした文化芸術活動を発掘できれば、文化力があふれるまちづくりにもつながっていくのではないかと期待している。
- (委員) 今までになかった企画も多いと感じる。企業との連携や伝統文化も大切なことだ。しかし、伝統芸能のデータベースはあるが、それ以外のジャンルでも把握していることが必要ではないか。後継者の育成のため、子どもたちへのアプローチも大事なことだ。ディレクター制度など、これからの 10 年、20 年に向けて、基盤整備の部分も考えてもらう必要がある。
- (事務局) 伝統芸能の継承のため、デジタルアーカイブ化をしたり、新市民会館にデジタルギャラリーを入れたりしていきたいと考えている。市民会館にきたら、何かわくわくするものが見られる、そんな市民会館にしていきたいと思っている。ディレクターや子どもの育成なども考えていきたい。
- (委員) 長野独自の文化を掘り起こすコーディネーターがいないと、文化は見えてこないと思うので、ぜひコーディネーターを入れて欲しい。特に、20 代、30 代に配慮したものがないように感じる。
- (委員) たとえば、風景画展を全国に発信するのもいいのではないかと思う。経済的な効果もあるのではないか。野外彫刻に草が生えていて見えないなどの声も聞くが、ケアもしっかりやってもらいたい。コーディネ

ーターのことは賛成だ。長野市にコーディネーターを置くことによって、人材育成ができ、活性化にもなると思う。

(委員) 地域の祭りを見ても、似たようなものがあるように思う。一本にまとめることが必要なのではないかと思う。

(事務局) 新年度に立ち上げる文化芸術関連施策調整会議の中で、検討していきたいと思う。

【(3)について】

(委員) 東京芸術大学との連携は初めて聞く話だ。素晴らしいことだとは思いますが、地元にも信州大学があり音楽関係の人もいるので、地元の機関ともぜひ連携を取って欲しい。

(委員) 私も初めて聞いた。東京芸大と舞台が直接どう結びつくのか、関係が分からない。また、市民ワークショップのメンバーに舞台会社社長やコンサルが入っており、非常に専門的である。市民ワークショップが必ずしもベストとは言わないが、その環境で市民と一緒にやっているという中で、芸大の役割や必要性が分からない。長野の地域のことを知ろうとしているのになぜ芸大なのか、率直に言って唐突と言う気がする。

(事務局) 劇場法制定の動きがあるが、法律でホールがどうなっていくのかを含めて、建築より運営上のノウハウを基にしたアドバイスを頂けると考えている。

(委員) 市民ワークショップは、シアターワークショップという会社が決まってから市民の公募が始まったため、会社選定に市民は係われなかった経緯がある。劇場法についても、初めから芸大が出てくるのが疑問だ。市民と一緒につくる市民会館というのであれば、先に芸大と決めてしまわずに、オープンにしてやっていただきたい。大学や大学以外のところでも複数のところと連携したほうが客観性があって良いと思う。

(事務局) 芸大と連携して他を排除するというものではまったくない。芸大とも連携して、ノウハウをもらいながら運営に役立てていこうとするものだ。

(委員) 大学はホール運営の実務経験が弱いため、ランニングコストや収益面で本当に大丈夫か心配だ。大学の先生を多くしてしまうと危険だ。実務レベルでやっている人にちゃんと入ってもらう必要がある。また、連携先が一つだと非常に偏ってくる。小布施町は東京理科大とのみ連携しているが、須坂市は地元中心に複数の学校と連携している。長野市は多様性を持たせ、東京志向ではなくしっかり考えて欲しい。

(委員) 複数の大学と連携した方がよいのではないか。

(事務局) 信大をはじめ他の機関とも連携は当然はかっていく。芸大はあくまでもアドバイスをいただく立場になる。また、平成23年度から生涯学習課に文化芸術推進室を設置し、庁内に文化芸術関連施策調整会議も設けることにした。

(委員) 地域にとってよい持続性のある文化芸術の拠点になるようにして欲しい。

【(その他)】

- (委員) 市民の皆さんが立派なホールが欲しいという思いで今までやってきたが、今回大震災が起こり、今こそ文化芸術が大事だという時期ではあるが、長野市民だけが合併特例債という国からの大きな援助を得ながらホールを作っているのかどうかと思っている。私個人としては、合併特例債を辞退すべきだと思っているが、他の委員の考えをお聞きしたい。
- (委員) 市議会まで通っている話を、地震が起きたので止めるというのも難しいと感じる。合併特例債の期限もあり、難しいと思う。
- (委員) この審議会は文化芸術振興審議会という立場であり、その立場に立てば今のとおり進んで欲しいというのが願いであり、現時点ではあくまで予定通りで良いと思う。
- (委員) 大変な状況で、この振興計画をそのとおりに進めて良いのか。文化どころか生活が伴わないという人がたくさんいて、かなり色々なことが変わり、それに文化芸術も無関係でないと思う。個人的には合併特例債は受け、国費を使うということに抵抗があるというか、そんなことでいいんだろうかと思う。長野市という地域の文化振興というのは、市民会館なしでは難しいということはあるかも知れないが、日本全体を考えて、断ることも良いのではないかと個人的には思う。
- (委員) こういう時代なので、再検討の余地はあると思う。もう一つは、下手をすると壊して何も建たないという状況が起きる可能性がなくはないので、慌てて壊すことが、今的確かどうかということ判断した方がいいと思う。慌てて壊してしまい、壊すお金も出なかったという可能性もなくはない。更地になってしまっても何も残らない、そういうプロジェクトは建築の現場ではいっぱいあるので、これも運営上配慮すべきことのひとつだと思う。
- (委員) 避難所としての役割もすごく必要なことだと思う。今の市役所、市民会館で大きな地震が来たときに、市民は避難所として利用できないかもしれない。使う側とか、住んでいる人間からしてみると、安全な場所でいいものができる環境を整えて欲しい、しっかりしたものを必要最小限で建てて欲しいと思う。やはり文化は必要と思うし、やっていこうと思っている人たちも大勢おり、それを聞きたいと思う人も、だんだん出てきていると思う。そういうものも必要なので、長野にこういう良いところがあるんだ、ここで演奏会や発表会をやりたいと全国から集まってくれるような施設を作れば、赤字じゃなくて黒字で運営できるようになり良いのではないか。市街地ももっと活性化し、全国から大勢の人が来てくれるような町になって、できれば前向きに進めていって欲しいと思う。
- (委員) 展覧会をやる者からしたら、まず展覧会をやめて会場費を震災の義援金に送ろうとかいう意見も出る。しかし、計画にあるような建物を建てて、芸術文化を楽しみ、集う。そこでみんなで励まし合い、何か見つかるんじゃないかというような気持ちでいる。何もかも閉じたり、ふさいでしまうのは、心が痛む。
- (委員) 賛成、反対ということでは決してないと思った。いろんな懸念があ

るということを十分認識して考えなければいけない。様々な意見があったということをしっかり伝え、あるいはこれを踏まえた上で、どちらの意見も、やはり芸術文化は大事だということである。入れ物も必要だけれども、それ以前に命、生活というものがやはり大事だ。目の前で困っている人がいた時には、入れ物を作るよりは、今あるものを。それで、そこに収容したり、お金を他に回すということも大事なことであり、そのあたりをよく踏まえていただけたら、この審議会の意義もあったのかと思う。